



Medical Excellence
JAPAN理事長

近藤 達也

こんどう・たつや 東大医卒。脳神経外科医。国立国際医療センター病院などを経て、08年医薬品医療機器総合機構（PMDA）理事長。「レギュラトリーサイエンス」（規制科学）を推進し、わが国の医療改革に貢献。19年から現職。79歳。

コロナ下の五輪、公衆衛生入念に

「トイレルート」なお警戒を

講壇

1年半に及ぶ世界におけるコロナに関する膨大な科学的、医学的なエビデンスに基づく医療上の情報は、科学的に整理された情報として公的に設立された大本営でもある専門家会議の責任において国民に明確に示されるべきであり、多様な意見が錯綜しているかのとくいわれているが、それながらどのような理論に基づくか明確に示してほしい。国民は、この専門家会議は日本を代表する専門科学者による「科学委員会」と理解している。大事な判断の基準につき、覚悟を持つたまどめとして報告を期待し、五輪開催に臨んでほしいと願うところである。

私は、医師としては脳外科を専門とするが、2003年当時、国立国際医療センター病院

は覚悟を持った五輪開催の方向性が示されている。公衆衛生的には無策での開催は決して許されるものではない。世論はワクチンの有効性に全面の期待をしているが、英国型、インド型などの変異ウイルスには必ずしも従来型と同様にはいかないかもしない。世界は日本の五輪開催に向けての勇気に注目する一方、政府、アカデミアの科学的な判断と実践をも注視している。この壮大な事業の方向性の判断と結果はあらためて日本国民および政府の健康に対する睿智と実行力が問われるものである。



コロナワクチンの接種を受ける山下泰裕日本オリンピック委員会（JOC）会長（JOC提供）

長として、大きな国際感染症にも責任ある立場でコロナウイルスの科学的知見、重症急性呼吸器症候群（SARS）の医学的知見、インフルエンザのような肺炎を起こす他のウイルスの生態など学び、最善の判断に努めてきた。

20年4月27日付のこのコラムでもその経験を通して、今後のコロナ対応について医師としての意見を述べた。現在の公衆衛生的対策は常に「3密」「人流」「エアロゾル」と、感染経路は基本的に呼吸器経路を意識したものが主体だが、人体への侵入経路としては「ACE-2」を有

（次回は早稲田大学政治経済学術院副学術院長の深川由起子氏です）

する細胞を介するしされ、呼吸器粘膜以外にも腸管粘膜、血管内皮も重要な経路である。呼吸器系統以外からの感染も十分に念頭に置くべきと考える。

中国保健当局は月初より、エアロゾルに加え、尿や便との接触に注意を示していた。鼻咽腔ンターが発表した内容で、乗客乗員への食事提供を担つた乗員数人の感染拡大が判明し、PCR陽性乗客が使用したトイレ周辺でコロナウイルスが多数検出されたことが分かっている。

また、患者さんを引き取り、治療にあたつた自衛隊中央病院からの貴重な多くの症例報告例中に、いわゆる「無症候性肺炎」が示され、コンピューター断層撮影装置（CT）で肺炎が認められたにもかかわらず、咳や痰が見られぬ状況が指摘され、感染経路としては、別ルート、つまり腸管粘膜を介するものが予想されるものであった。

このほか、都営大江戸線の簡易宿舎における運転士の集団発生も水回りの感染源についての指摘があった。このような状況下、あらためて「トイレ」の衛生管理を徹底すべきと提言するところである。